

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2017-12-01

特集 日韓都市デザイン交流会

目次

P1

■巻頭

「日韓の都市デザイン交流の展望」
／（写真・文）倉田 直道

P2～6

■TDA NEWS

「韓日都市デザイン交流会 2017 開催報告」
／矢内 匠
「大禾洞の“都心に戻ってきた灯台プロジェクト”」
／李 衡馥
「日韓都市デザイン交流会を続けてきて」
／吉田 慎悟
「日韓都市デザイン交流会の意義と今後の課題」
／李 錫賢

P2～3

■ランドスケープ事情

「ランドスケープとまちづくり」
／井上 洋司

P6

■シリーズ：地域から

「加須市」その2
／若山 範一

■景観ビジネス最前線

／東和スポーツ施設㈱

■ホワイトボード



●日韓都市デザイン交流会 2016：始興市と水原市での様子

日韓の都市デザイン交流の展望

私自身振り返ると欧米の都市デザインの経験に学ぶことが多かった。書籍、インターネットを通して得た情報から学んだことも少なくないが、現地に足を運び、その成果に直接触れるとともに、その事業に直接関わった行政の担当者や専門家から背景や取り組みのプロセスについて話を聞くことで学んだことは比較にならないほど多かった。ただ単に情報を得るだけではなく、刺激となり、自分自身のモチベーションに繋がるのが大きかったように思われる。しかし、近年は海外における都市デザインについても、web などを通して簡単に情報が得られ、また我が国の都市デザインの取り組みがある水準に達したことから、海外の経験から学ぶという姿勢は希薄になっているように思われる。

今年の日韓都市デザイン交流会は、改めて国際交流の意義を感じた。韓国側の参加者が、いずれの視察先でも熱心に質問を繰り返す姿が印象に残った。その質問も、彼らが自国で抱えている課題を念頭においているため、その課題解決の手掛かりを求めているようにも思われ、その謙虚で真摯な姿勢を見ていると韓国側参加者が何を求めて交流会に参加しているかがよく分かった。また、昨年の交流会の訪韓では、これまでの日本の経験からの学びが、韓国のまちづくりの中で結実していることが確認でき、改めて日本における取り組みを海外の事例を通して評価する機会ともなり、多くの刺激を受けた。

まちづくりにおける国際交流も一方的に他国の経験に学ぶというステージから、相互にその経験から学び、経験を共有し、刺激し合い、高め合う、より持続的で互恵的な関係を築いていくステージに入ってきているように思う。日韓の都市デザイン交流にも、そうした国境を越えた専門家間の交流活動への展開を期待したい。

TDA 代表理事／工学院大学名誉教授 倉田 直道

TDA 日韓交流イベント 『韓日都市デザイン交流会 2017』

今年で3回目となる韓国の専門家との交流会は、韓国の視察団をお招きし、10月27日～28日の2日にわたって視察とシンポジウムを開催した。今回のテーマは「まちづくり活動への住民参加」。

地域住民が主体となってまちづくりを進めている成田山新勝寺参道、墨田区北斎通り界限と台東区浅草寺界限をまちあるき視察、シンポジウムを行った。

1

韓日都市デザイン交流会 2017 開催報告

矢内 匠
TDA 正会員

【まち歩き視察】（10/27～28）

①成田山新勝寺参道（10/27）

成田山新勝寺参道は、成田不動尊の参拝客や観光客で賑わう参道であるが、30年前、市内でテーマパークの計画が持ち上がったことから、観光客の減少を危惧した地元商業者が中心となり、壁面の後退、店舗の沿道側の底、スカイラインの統一、照明や看板のデザインコードを設定し、参道の持つ文化や歴史といった雰囲気壊さな



●成田山新勝寺参道



●成田での討論会

い取り組みがなされている。

（協力：成田市、成田山表参道仲町街づくり協議会）

②墨田区北斎通り（10/28）

墨田区北斎通り界限は北斎美術館の開館により観光客が増えた。地形は起伏がないため、2度の大火で市街地が焼失し、まちの歴史がリセットされた経験を持っている。戦後は町工場と商業施設と住宅が混在した景観資源が少ない普通のまちとなった。さらに公害問題で大規模工場が移転したことによる人口の減少によるコミュニティの再生、まちのアイデンティティの確立が必要であることから、地域住民が主体となり、まちの景観やまちづくりに関する



●まち歩き視察のため集合した韓国メンバー



●墨田区北斎通り

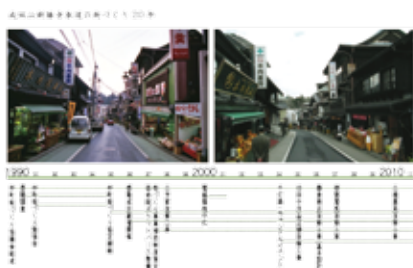
ランドスケープ事情

ランドスケープとまちづくり

～成田山新勝寺表参道整備の27年を振り返りつつ～

表参道	表参道	表参道
表参道は、成田山不動尊の参拝客や観光客で賑わう参道であるが、30年前、市内でテーマパークの計画が持ち上がったことから、観光客の減少を危惧した地元商業者が中心となり、壁面の後退、店舗の沿道側の底、スカイラインの統一、照明や看板のデザインコードを設定し、参道の持つ文化や歴史といった雰囲気壊さな	表参道は、成田山不動尊の参拝客や観光客で賑わう参道であるが、30年前、市内でテーマパークの計画が持ち上がったことから、観光客の減少を危惧した地元商業者が中心となり、壁面の後退、店舗の沿道側の底、スカイラインの統一、照明や看板のデザインコードを設定し、参道の持つ文化や歴史といった雰囲気壊さな	表参道は、成田山不動尊の参拝客や観光客で賑わう参道であるが、30年前、市内でテーマパークの計画が持ち上がったことから、観光客の減少を危惧した地元商業者が中心となり、壁面の後退、店舗の沿道側の底、スカイラインの統一、照明や看板のデザインコードを設定し、参道の持つ文化や歴史といった雰囲気壊さな

表：景観の調査の一部（1990年）



1990～2010年までの街並再生の過程と街並の変化

わたしの手元に古びた報告書がある。「表参道整備基本計画策定」／成田市と書かれた事務所で行った調査の報告書である。1990年9月25日、私の事務所に普通の会社員・男女9名の若者に集まってもらった。成田山表参道のスライドをおよそ1時間見ていただいた後「わざわざいきたいくなる街とは？」というテーマの座談会をした。議論は主に3つに縛られた。

1：街の個性がはっきりしている事／2：住む人が安らぐ街である事／3：人の創るアクティビティが多様である事

今でも通用する議論だ。この3つの事を新たに創り出すために、まずその街がどのような街かを発見する必要がある。これを導きだすためにランドスケープ的に街の分析を試みた。この「景観調査」は1970・80年代のデザインサーベイの手法とアメリカで行われていたランドスケープ調査の混合のような調査で、地形や、街並の創るスカイライン、アイストップの有無、建築物の機能、業態、現存する伝統的建築を実測する事で、建築が作り出す外部空間や、佇まい（風景）の原則を発見したり、街そのものの構造を発見しようとする調査である。これで、街の整備事業方法と方針を見つけようとした。

◆3つに分かれる街の姿

調査の結果（表がその一部）、わずかな地形の違いによって表参道といわれる道は大

考え方をまとめ、活動を行っている。

(協力：墨田区)

③台東区浅草 (10/28)

台東区浅草寺界隈は、東京を代表する観光地であるが、地域全体の回遊性の再生を目指し、浅草寺周辺の各商店街の特徴ある景観整備が行われている。その中の六区(ロック)地区は、寄席や劇場が立ち並び興業街であるが、それらも近年減少し、複合ビルへの建て替えが進められ、まちの賑わいなくなりつつあった。まちの賑わいを取り戻すため、地域住民の要望により地区計画を策定し、「東京一の興業街」にふさわしい街並み形成を行っている。

(協力：台東区)



●浅草六区地区



●浅草伝法院通り (背景に東京スカイツリー)

【シンポジウム】 (10/28)

まち歩き後に開催されたシンポジウムでは、韓国側から2件の発表があった。日本側も含め発表された4件の事例の全て、住民を主体とするまちづくり事案であった。



韓国では、都市再生が重要な政策の一つとなっている。また、ソウルなどの大都市では大規模な開発が進む一方で、都市のアイデンティティがなくなっていることが課題となっている。パネルディスカッションでは、その解決策の一つとして、今回の3つの視察地域のような、継続したまちづくりが必要であり、表面的な整備だけでなく、地域のコミュニケーション、文化、芸術を大事にしていくことが重要ではなかという意見が出た。

また、行政の役割についても質問が挙げられた。特に、両国とも住民は陳情ばかりで行政とは敵対の構図になりがちである事を問題視した。しかし、今回の事例にあるように、まちづくりは住民だけでは出来ないし、行政だけでも出来ない。市民と一緒に、小さなプランでもよいから成功事例をつくり、少しずつでも進めていく必要がある。行政側も、一緒になって考え

る市民を育てる工夫が必要であり、そういう人がいれば市民とも建設的な議論が出来、サポートをうけられる関係が築けた。

最後に、今回の交流会で、多忙の中、準備や当日の案内、通訳をしていただいた各関係者の皆様に、この場をかりて感謝を述べたい。

《講演登壇者》

リー・ヒュンボク氏 (大田世宗研究院・都市基盤研究室責任研究委員)

ユン・ジノク氏 (㈱ヨリン空間 E&D 代表)

村上 美奈子氏 (墨田区景観アドバイザー)

斉藤 博氏 (建築家/まちづくりアドバイザー)

《パネルディスカッション登壇者》

リー・ソクヒョン氏 (韓国・中央大学教授)

《コーディネーター》

倉田 直道 (TDA 副代表理事* / 工学院大学名誉教授)

※シンポジウム開催時

《シンポジウム会場》

台東区立浅草文化観光センター



(左より) リー・ソクヒョン氏、ユン・ジノク氏、リー・ヒュンボク氏



(左より) 斉藤氏、村上氏、倉田副代表理事 (開催時)

TDA 正会員 / 背景計画研究所代表 / 成田市景観アドバイザー 井上 洋司



看板の中に眠る伝建を再生
成田の街並再生のきっかけとなった商家 (三芳屋)



裏庭にできたカフェ (左)
18年後庭が改変して全く異なる雰囲気 (右)

きく3つに分かれている事をつかんだ。この違いをどのような方針、事業の枠組みで行うかを街の方達、市担当者等と議論し、3つの事業スキームが適合されることになった。

1: 駅前再開発の手法と道路改良事業……駅に近い花崎町を中心に

2: 道路改良事業……後背地に余裕のある幸町を中心に

3: 地形的に建築と道との歴史的関係が最も色濃い仲町は、市独自の保全事業とする

現在、全国で115カ所認定されている重要伝統的建造物群保存地区が30カ所しかなかった時、市独自の保全事業は、いろいろな点から難しかった。そのため、一番事業手法が不透明な仲町の整備を、私のところがお手伝いすることになった。

「街づくり協議会」の勉強会出席、懇親会を兼ねた先進地視察、街並協定書 (今で言うデザインコード) のたたき台づくりとその調印のお手伝い、保全のための補助金制度の資料作り、果ては共同溝の概算見積もり、各店舗の保全改修のデザイン、あるいは監修等の活動を続けて来た。その過程では、宴会話から生まれたお祭りが街のメイン祭典に成長したり、諸々の出来事で人間的に自分自身も大いに成長させてもらった。ふと気がつけば27年のおつきあいだ。

今回、韓国の専門家の方々をご案内してしばらくぶりに参道を歩きながら、そろそろもう一つの大きな課題に向かわなければいけない時期にきていることを感じている。

2

大禾洞（テファドン）の“都心に戻ってきた灯台”プロジェクト



李 衡馥 リー・ヒョンボク
大田世宗研究院・都市基盤研究室責任研究委員

本プロジェクトは、地域住民がまちづくりに参加して地域の共感を高め、地域の環境や条件に合った公共デザインを実現することが目的である。事業対象地の大禾洞（テファドン）（大田広域市：韓国中部地方の中心都市）は、老朽化した住居環境によって犯罪に対する住民の懸念が高い地域である。そのことから本プロジェクトでは犯罪予防環境デザイン（CPTED：Crime Prevention Through Environmental Design）の概念を取り入れ、より安全なまちづくりと地域コミュニティが向上できる文化空間の構築を目指す。

衰退した大禾洞地域の都市再生・ルネサンスに向けて公共デザインにCPTEDの概念を盛り込み、“灯台”をコンセプトとした。“灯台”は安全のための施設であり、時には回帰を意味することもある。そのためプロジェクト名称も安全を象徴する“都心に戻ってきた灯台プロジェクト”と命名した。

ハード面では第一にCPTED技法を適用した犯罪予防のための施設として、住民が自然に監視できるような運動コースを設けた。第二は、使われなくなった子供の遊び場にコンテナ活用が多目的会議スペースを設けた。さらに、住民たちのイベント活動が可能な小さな舞台も設置した。第三に、廃家のコンバージョンによって老年層のための空間を作り出した。



ソフトウェア面では第一に住民が自ら運営できる文化プログラムをつくり、第二に村の祭りを企画した。第三に、村の存在を知らせる情報誌と広報物を製作した。第四に、プロジェクトが始まる段階から終わるまでの過程を記録物に残した。また、プロジェクトのアイデンティティを向上させるため、地域ブランドの開発も進められた。このような一連の作業を通じて地域のイ



メージの向上や住民たちの文化活動が活発になった。

本プロジェクトのもう一つの目的は、従来の整備手法から脱し、公共デザインを通じて住民が満足できる文化空間を産・学・官・民で一緒に作ってみようとしたことである。私たちは、本プロジェクトが衰退した大化洞地域の都市再生のための出発点になることを期待している。今年8月にオープンした“都心に戻ってきた灯台”は住民たちから多く愛されている。これからもより多様なイベントの空間として活用できることを期待する。そして、小さなまちづくりプロジェクトではあるが、公共デザインのモデルとして評価されることを期待する。

今回の日韓デザイン交流会に紹介されることを大変嬉しく思い、今後も持続的に多様な交流が行われることを願っている。



3

日韓都市デザイン交流会を続けてきて



吉田 愼悟
TDA 副代表理事
色彩計画家／武蔵野美術大学教授

日韓都市デザイン交流会は一昨年から始まり、今年で第3回目を迎えた。第1回は鎌倉・横浜を視察し、関内でシンポジウムを開催した。第2回は韓国のシフン市と世界遺産のまちスウォンを視察し、スウォンで交流会議を行った。そして第3回となる今年は成田と墨田区の亀沢地区を視察し、浅草の文化観光センターでシンポジウムを開催した。

2008～9年頃、私は韓国の色彩学会等から呼ばれ、景観形成を推進するための色彩基準のあり方について数回講演を行った。日本では1980年代から景観条例の中で蓄

積した色値による大規模建築物等の色彩基準が、景観法施行後の景観計画にも取り入れられ、幾つもの景観行政団体が新しい展開が図られていた。

その頃韓国でも同様な動きがあり、色彩の専門家が協力して色彩基準が策定されていた。この韓国における色彩コントロールは日本での展開等を見本として行われたために短期間で実現していた。日本における色彩基準の策定は1970年代のスーパーグラフィック運動等も経験していたこともあり、建築における色彩表現の自由度を妨げないように慎重に時間を掛けて進められた。そして策定された色彩基準はかなり甘めのネガティブチェック的な要素が強いものとなり、地域特性を取り込んだ景観地区等への色彩基準のあり方の検討はその後も継続している。このように景観における色彩コントロール方法は日本では永い時間を掛けて検討し、実験し、積み上げてきたが、韓国での色彩コントロールや屋外広告物の規制は短期間に実施された。

講演のために韓国を訪れていた頃、横浜市立大学教授の国吉直行さんとソウルで会った。国吉さんも横浜の都市デザインを紹介する講演を依頼されていた。そして、夕食会の時に韓国中央大学の李教授も加わり、韓国と日本のまちを視察しながら都市



●韓日都市デザイン交流会 2015（於：横浜）



●日韓都市デザイン交流会 2016（於：シフン）
下水処理施設を会場としたミニシンポジウム



●日韓都市デザイン交流会 2016（於：スウォン）
シンポジウムで講演する倉田副代表理事（開催時）

デザインの交流会を開催することを話し合ったように記憶している。そして、景観デザイン支援機構が主催する第1回韓日都市デザイン交流会は2015年に始まった。

今年、第3回目となった韓日都市デザイン交流会では、成田と墨田区の亀沢地区、そして浅草を見学した。浅草は観光客も多く外国の人にもよく知れた場所だが、成田や亀沢地区は韓国の人達にはあまり知られていないようだった。私自身、成田は何度か訪れているが、TDAのメンバーでもある井上洋司さんの仲町地区のまちづくり活動の話はとても印象深く聞いた。



●成田を視察する交流会メンバー



●成田の旅館の大広間の見学

更に交流会の二日目に計画工房の村上美奈子さんに墨田区の亀沢地区を案内してもらったが、韓国の都市デザイン関係者にとって、戦災で消失した地域性を新たに再生する地道な試みには学ぶべきことも多かったようだ。亀沢は一見、見学するようなものがなさそうな普通のまちだが、「亀沢地区建替え調整会議」等の活動の仕組みを聞きながら見るまちの景色はまた違って感じる。韓国の都市デザイン関係者も日本



●小雨の中、亀沢地区を視察する交流会のメンバー

の地域の景観形成は地道で変化が遅いが、住民の意識も含めて確実に変わっていく姿に新たな興味を持ったようだ。韓国ではこれまで行政が主導して強力に景観形成を推進してきたが、その速度を疑問視する声も大きくなってきている。

今回のシンポジウムでも地域景観と市民参加の問題は大きなテーマであった。交流会では、これからの都市デザインは、単に新しく美しい景観をつくるのではなく、地域の暮らし振りを見つめ直し、それぞれの地域が持っている本当の個性を育てる活動でもあることを確認し合った。



●浅草で行われた都市デザイン交流会シンポジウム



今回の東京と成田で行われた交流会を含め日韓都市デザイン交流会は3年目になった。数年前、韓国で交流していた何人かで都市デザインの相互的な発展のため色々な経験を交換しようと軽く始まった集いが、このような立派な交流会になるとは誰も予想しなかった。しかし、交流会を続ければ続けるほどお互いに持っている様々な経験を知り、かつ各都市の魅力やデザインの興味深い面が浮かび上がってきた。それは両国の歴史や文化の違いのみならず、それぞれの都市の歴史やそこに住む人々の違いが背景にあるからである。その多様性があるから都市デザインは面白い。

韓国の都市デザイン専門家達の多くはまだ若く、多方面で日本の専門家に学んでいることは間違いない。そのような状況の中でも多様なデザインが生まれるのは、都市デザインが地域や場所、人なしでは成立できないからである。だからこそ、この交流会は時代や国境、年齢を超えて、その持っている意義は大きい。

3年間、日本の東京や横浜、鎌倉、成田、韓国のスウォンやソウル、シフンなど、両国の諸都市での体験の記憶や学びはこれか

らも人々を通してさらなる都市デザインの進化につながることは明確である。特にお互いの都市デザインの事例を目で確かめながら、その過程を現場で担当した人から直接聞くことができ、さらに次の課題に必要な議論も現場で行うことができたことは、非常に貴重な体験であったと思う。

これから韓国は、政府の都市再生中心政策の影響で都市デザインの仕事はより多くなることが予測できる。今までやってきた試み以上に持続可能で地域の人々に愛される空間デザインが必要になる。そこにも日本の都市デザイン専門家達の経験と能力が大きな力になると思われる。またこれをきっかけにして日韓都市デザイン交流会が国境を超える都市デザイン発展の源になれると思う。それ故、より多くの人に声をかけて交流会を発展させるべきと考える。



●韓日都市デザイン交流会 2015 (於：横浜)

しかしより意味深い交流会を発展させるためにはいくつかの課題もある。まず、交流会の成果を資料としてきちんと残す必要がある。交流会では、新しい交流を通じてたくさんの成果と課題を議論してきたが、その根拠になる記録がないため次の世代に成果を伝えることが難しい。

また、現在は韓国と日本が中心になっているが、東北アジアには台湾や中国、モンゴルなど価値ある都市デザインの歴史を持つ国が他にもいくつもある。それらの国は韓国と日本でやってきた都市デザインの経験が必要であると考えている。できれば4～5年後には韓国と日本の都市デザインの専門家達が一緒に他の国の都市デザインの仕事を一緒に挑戦することも価値があると思う。

この場を借りて、この交流会が進むよう努力してきた日韓の都市デザインの先輩達に感謝したい。何より、この交流会を通じて同じ仕事をしている懐かしい仲間と久しぶりに会えることが次の交流会を楽しみにしている理由でもある。来年は韓国での第4回の交流会を期待している。次の開催地で新たな楽しみが待っているに違いない。

「加須市」その2

街づくりとものづくり



Kisai machidukuri というプロジェクトは「ものづくり」をしている作家やクリエイターの皆様に空き店舗を創作創造の場として使用していただき商店街を賑やかにすることをメインの活動としている。その為にも日頃から空き店舗や空き地の整備を進め、商店街の魅力を伝えるために「ものづくり通り」というイベントを開催している。騎西地域に縁のある作り手を紹介する「MONO+」というフリーペーパーの発行や「MONO+ Selection」というセレクトショップを通して、ものづくりの魅力を発信している。

騎西商店街は、1丁目から3丁目まであり、長さが約1kmある。商店街の団体も複数あるが、連携がとれていないのが現状である。私たちは、それらの垣根を超えて「騎西商店街」という大きなくくりで活動を進めたい。現在は1丁目のみであるが、徐々に範囲を広げていく計画だ。

このプロジェクトにとって地域の人たちの理解とサポートは必要不可欠である。2年目となる今年度からは、一丁目の商店の方々より寄付を頂くなど支援をいただいている。また、当初より、加須市からはイベントの際の空き店舗の家賃援助と商工会からは運営費の援助を頂き多くの方々に支えられているのが現状である。

しかし、以上の運営活動費を運営が独自に作っていく仕組みづくりこそが、長いスパンで活動が続いていく上で重要だ。空き店舗や空き地を利用するにあたり、それを家主・地主と借りる人たちの仲介をする役割が必要不可欠であり、それを街に住む当事者である私たちがなうことで、プロジェクトを容易に進める事ができると考えている。家主と近い立場という強みを活かした仲介をすることで費用を捻出することが可能であると考えている。

そのためにも、商店の方々や街に住んでいる人たちが当事者となるのが大切であり、地道な活動を重ねて商店街というコミュニティをふたたび構築する。情報の発信と誰でも参加できる環境を整えることに重点をおくことで、新しい人材やアイディアが集結する土台を固めてきた。その土台を活かして、より魅力的なプロジェクトを進めていくことを次のステップとして考えている。

人と人との繋がりがこの商店街を支えてきたように、これからも私たちのプロジェクトが多くの人と人を繋ぎ、この街を次の世代に繋げていくことが私たちの役目だと思う。「ものづくり」と同じように1つ1つの工程を丁寧に、ずっと愛され続ける街を想いながら、歩んでいく。

景観ビジネス最前線



Field of Smiles 子どもたちのあふれる笑顔が未来を変える
東和スポーツ施設株式会社
Towa Sports Facilities Co., Ltd.

グラウンド・各種競技場の設計から工事・メンテナンスまで

一步一步環境問題に取り組んでいます



リサイクル材が「土」に生まれ変わるという新常識！



透水性 が高く水はけ抜群。
保水性 が高く散水量を軽減し
更にヒートアイランドを抑制できます。



リサイクル材を用途に合わせて配合します。
グラウンドから芝の床土まで、
あらゆる場所や用途にご利用いただけます。

□ 本社 〒606-8284 京都市左京区北白川下池田町79-1 TEL: 075-702-1177 FAX: 075-702-1235
□ 東京営業所 〒135-0016 東京都江東区東陽1-23-11 TEL: 03-6666-6058 FAX: 03-6666-6057
E-Mail: info@towa-sports.co.jp

HP <http://www.towa-sports.co.jp/>



ホワイトボード

今回は日韓の都市デザインの専門家の交流会を特集しました。記事を読んでいただければお分かりいただけると思いますが、景観はその場所における人間の所作の集積である事が良くわかり、正に“景観は文化”である事を実感できる号になりました。

TDAでは第12期定例総会において、新代表理事に倉田直道、副代表理事に宮沢功、吉田慎悟となり、新たなスタートを切る事になりました。今号は編集作業の遅延により発刊が遅れ、ご迷惑をおかけした事を編集委員を代表して陳謝いたします。(編集長:井上)



NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
(株)昌平不動産総合研究所 / (株)住軽日軽エンジニアリング / 都市環境デザイン会議 / (株)コトブキ / (株)都市環境研究所

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel: 080-6722-4114 Fax: 03-3847-3375 E-mail: main@tda-j.or.jp
<http://www.tda-j.or.jp> <https://www.facebook.com/tda.public>

【編集: (株)アーバンプランニングネットワーク】 2017121000